

きほく通信

第84号
令和2年
9月1日
発行

難病
患者家族会
きほく

【会長】神森 和子
紀の川市中三谷
【相談室】0736(75)4413
【事務局】〒649-6612 紀の川市北涌371
森田方 TEL 0736(75)4413

お盆の出来事

事務局 森田良恒

夜遅く、知人の奥さんから電話が入りました。
「すぐ来て、助けて…」

悲鳴に近い差し迫った電話でした。

彼の家に着くと、厳しい表情をして布団の上に正座した彼と奥さんが向かい合っていました。
「どうしたん？」

と聞くと、彼は

「ぼくねー、大変なことをしてしまった。責任をとらないといけない。だから家内といっしょに死んでお詫びする」というのです。よく見ると布団の下に包丁の柄が目に入った。

理由は分からないけど、本気だと直感しました。たぶん奥さんが私に電話する前には「一緒に死んでくれ」と何度も言われたのだらうとおもいます。私はよく意味が分からず、とにかく理由を聞かせてほしいと言いました。

奥さんがその理由をすべて話してくれました。しかし、聞けば聞くほど大変なことでもなければ責任をとらなければならないようなことは何もありません。

その夜、彼が落ち着くまで話を聞き、2人だけではないように心がけ、明け方帰宅しました。

翌日、私は奥さんに、「病院で見てもらって」と話しました。私は、彼が病気だと思ったからなのです。彼は責任感が強く、生真面目几帳面で内向的な性格な人なのです。

思い込みや思い詰めることで、正気を失ったように感じたからでした。

私は「責任をとらなければならない失態」ということを精査して、私だけではなくそれなりに地位のある方にも同席してもらい、まったく問題がないことを何回か彼に説明をしました。

それでも、毎日同じことを話し「このままでは生きていけない」と、自分が悪いとくり返す日々が続いたのですが、刃物沙汰はなくなることがなによりでした。

それは処方された薬のおかげでもあるのですが、その後残念ながら口の渇きや言葉が出にくいなどの副作用に悩まされたのです。

しかしやがて、デイサービスなどを利用してくれるようになり、少し奥さんにも自分の時間がもてるようになりました。

一回り以上年下の私に全幅の信頼を置いてくれ、優しく生真面目で穏やかな彼が大好きでした。

8月10日深夜、その彼が心筋梗塞で急逝の知らせが入りました。

お盆の悲しい知らせでした。

コロナ禍で家族も揃うことのできない寂しい密葬でしたが、私は心を込めて次のような追悼文を奉じました。



追悼文（一部）

「其れ、炎天の猛暑、飯盛龍門の峰々は緑風とは言いがたき熱風を吹雲し、紀ノ川もその流水を温め、人々もコロナ疫病蔓延のなか熱中症を氣遣いしつつもマスクする様態はあまりにも希有なる立秋となれり

されども季節の移ろいは必ずや秋風爽やかなあらたなる季節を迎うるといへども、生者必滅は、人、その生命たるや現世に再び命を迎うることなく、尊きは人として生きたる一生にこそ、春夏秋冬の波瀾を包含せしめるもの也り

（中略）
法務に携わる師の御姿は、常に穏やかにして細心深慮し、丁寧且つ高い責任感を捧持し朋友一同の信頼は高邁余りあるもの也り

ああ哀しいかな、悲しいかな、師の突然なる遷化は朋友知友の心の柱を失えり（後略）

*
今、私は自坊にて彼の経木位牌を祀り、中陰忌を勤めさせていただいています。

一度落ち着いたかと思われたコロナ感染も夏場でありながらぶり返しているようです。

病気をもちながら日々不安な状況におかれてい

ることと思いますが、まだまだ猛暑が続くなか、しっかりと栄養をとり、何とぞご自分の体調専一にご自愛下さいませ。



会員皆さまの体験、絵画、絵手紙、写真、俳句短歌などの投稿を待っています。